

【大意】名儒と稱せらるる人は待詔して公車に滿つ、才子と喚ばるる人は郎官と爲つて石渠閣に典す、其の郎官たる君は蓮花法藏の梵字を心に懸悟し、又貝葉經文の梵字を手自ら書す、君が楚辭に達することは古の楊馬にも勝る、然るに梵字は他人の多く解せざるもの、君に魯魚の誤あるも辨する人は無し、故舊の君に望む所は要するに三事に在るのみ、願ふ君の承明廬を去りて山中に入らざることを、

【餘論】此の詩の作法亦一體なり、前半は拗體を以て成り、後半は正體を以て成る、唐賢往往之あり、而して戲の意味は特に第六句に在り、本集に苑威の答詩を附す、下の如し、蓮花の梵字本天よりす、華省の仙郎早く禪を悟る、三點伊を成して猶ほ想あり、一觀幻の如く自ら筌を忘る、文を爲り已に變ず當時の體、用に入りて還つて推す閒氣の賢、應に同じかるべし羅漢の名欲なきに、故に馮唐と作りて歳年を老ゆ、

重酬苑郎中 井序

重ねて苑郎中に酬ゆ 井に序

頃輒奉贈忽枉見訓。敍末云、且久不遷。因而嘲及。詩落句云、應同羅漢無名欲。故作馮唐老歲年。亦解嘲之類也。

頃輒奉贈す、忽ち酬い見るを枉ぐ、敍末に云ふ、且久しく遷らず、因つて嘲り及ぶと、詩の

落句に云ふ、應に羅漢の名欲なきに同じかるべし、故に馮唐と作りて歳年を老ゆと、亦解嘲の類なり、

何幸含香奉至尊。

何の幸ぞ香を含んで至尊に奉ずる、

多慚未報主人恩。

多く慚づ未だ主人の恩に報いざるを、

草木豈能酬雨露。

草木豈能く雨露に酬いん、

榮枯安敢問乾坤。

榮枯安んぞ敢て乾坤に問はん、

僊郎有意憐同舍。

僊郎意あり同舍を憐み、

丞相無私斷掃門。

丞相私無く掃門を斷つ、

楊子解嘲徒自遣。

楊子解嘲徒らに自ら遣る、

馮唐已老復何論。

馮唐已に老ゆ復何ぞ論せん、

是に於て口に爲香を含む、其の氣息芬芳たればなり、掃門、『史記』に、魏勃、少時、齊の相曹參に見ゆるを求めんと欲す、家貧にして、以て自ら通ずる無し、乃ち嘗て朝り早夜、齊の相の舍人の門外を掃ふ、舍人之を怪しみ、竊かに之を伺ふ、勃を得たり、勃曰く、相君に見えんと願ふも因なし、故に子が爲めに掃ひ、以て見んことを求む、是に於て舍人、勃を曹參に見えしむ、因つて以て舍人と爲す、解嘲、漢の哀帝の時、董賢、事を用ふ、之に阿附する者、或は家あり起り、二千石に至る、雄は太玄を草し、以て自ら守り泊如たり、人、雄を嘲るに、玄尚ほ白きを以てす、雄、之を解きて解嘲を作る、苑を以て楊雄に比するなり、

【注解】

羅漢、阿羅漢の略、小乗の悟を究めたる位の名、梵名阿羅漢、譯して殺賊、不生等の名あり、煩惱を殺して、涅槃に入り、復此の世に生ぜざるの義なり、名欲、名利と欲念、馮唐、『史記』に、漢の馮唐は、孝を以て著ぼる、中郎と爲つて文帝に事ふ、要に車輪都尉と爲る、景帝立つ、唐を以て楚相と爲し、免す、武帝、賢良を求む、馮唐を擧ぐ、唐時に年九十餘、復官と爲る能はず、含香、尙書郎は常に奏事對答の役なり、

【大意】頃者一詩を奉贈せしに、忽ち和詩を賜はる、和詩の中に一官久しく遷らず、故に自ら嘲ける、且自分は羅漢と同じく煩惱全く無く、是の故に古の馮唐の如く徒らに歳年を老ゆと言へるが、是亦楊雄が解嘲を作ると類を同じうするものなり、君は何の幸ぞや香を含んで至尊に咫尺する、多くの官人は主人即ち天子の恩に報せざることを慚ちとす、草木は雨露有るが爲めに生毓するも、草木は雨露に酬ゆる無し、草木の榮と爲り枯と爲るも、其の理を乾坤に問ふの要無し、僊郎は意あるが爲めに同舍の我に酬詩を贈らる、丞相は私無きが故に掃門の私事は謝断する、楊雄は解嘲の賦を作りて徒らに自ら慰みを遣る、僕は昔の馮唐の如く已に老ゆ、復何の論かあらん、

【餘論】此の詩は拗體を以て作る、苑が原作拗體なればなり、已に酬詩なり、是の故に多く苑を慰安する語を以てし、最後に自己を敍す、人に酬ゆる詩宜しく此の如くなるべきなり、順可久曰く中間意緒轉摺太だ多し、一篇の文字數百言を約略して、五十六字中に盡く、此等の詩、最も高品なり、温雅悠長

酬郭給事

郭給事に酬ゆ

洞門高閣霽餘暉

洞門高閣餘暉霽たり、

【注解】洞門、漢書董賢傳に、重

桃李陰陰柳絮飛

桃李陰陰柳絮飛ぶ、

禁裏疎鐘官舍晚

禁裏の疎鐘官舎の晩、

省中啼鳥吏人稀

省中の啼鳥吏人稀なり、「もする無し、

晨搖玉佩趨金殿

晨に玉佩を搖加して金殿に趨り、

夕奉天書拜瑣闌

夕に天書を奉じて瑣闌に拜す、

強欲從君無那老

強ひて君に從はんと欲するも老を那と

將因臥病解朝衣

將に臥病に因つて朝衣を解かんとす、

賈門郎は賈門令に屬す、日暮入りて青瑣門に對して拜す、名けて夕郎と曰ふ、解朝衣、晉の裴協の詩、抽解朝衣とあり、

【大意】洞門の高閣は餘暉に映じて霽たり、桃李の陰陰に當つて柳絮が盛んに飛ぶ、禁裏内より出づる疎鐘は正に官舎の晩を報ず、省中に啾啾と鳥が啼く、吏人去つて稀なればなり、君は毎晨に玉佩を搖加して金殿に拜趨し、毎夕天書を奉じて瑣闌を守護す、僕も強ひて君に從つて勤勉せんと欲するも老朽を奈ともすること無し、況んや臥病の身、官服を罷めんと欲するなり、

【餘論】此の詩は前半黃昏の景を敍し、而して五六の二句は給事が精勤の事を敍し、七八、自身の事を敍す、作意は明白なりとするも、晚、晨、夕の字を押し、律としては頗る嚴ならざるの感あり、晚

の字「唐詩正音」に曉に作る、曉としても下の晨に支障あり、漁洋の「唐賢三昧集」之を收むと雖も、余は右丞が詩の上乗と爲さざるなり、

既蒙宥罪。旋復拜官。伏感聖恩。竊書鄙意。兼奉簡新。除使君等諸公。

既に宥罪を蒙り、旋つて復官に拜せらる、伏して聖恩に感じ、竊かに鄙意を書し、兼ねて新除の使君等諸公に奉簡す

忽蒙漢詔還冠冕。始覺殷王解網羅。日比皇明猶自暗。天齊聖壽未云多。花迎喜氣皆知笑。鳥識歡心亦解歌。

忽ち漢詔を蒙りて冠冕に還り、始めて覺ゆ殷王の網羅を解くことを、日は皇明に比すれば猶ほ自から暗く、天は聖壽に齊うして未だ多しと云はず、花は喜氣を迎へて皆笑を知り、鳥は歡心を識りて亦歌を解す、

【注解】漢詔は天詔と同じ、殷王、殷の湯王なり、解網羅、史記に、湯出でて、野に網を張る四面なるを見、祝して曰く天下四方より皆吾が網に入れ、湯曰く唯盡くせり、乃ち命じて其の三面を去らしむ、祝して曰く左せんと欲せば左せよ、右せんと欲せば右せよ、命を用ひずんば乃ち吾が網に入れ、諸侯、之を聞きて

聞道百城新佩印。還來雙闕共鳴珂。

聞道らく百城新に印を佩ふと、還來りて雙闕に共に珂を鳴らす、

曰く湯の德垂れり、禽獸に及ぶと、

【題義】本傳を案するに右丞累に給事中に遷る、安祿山反す、賊の得る所と爲る、祿山素其の才を知る、迎へて洛陽に置き、迫つて給事中と爲す、祿山大に凝碧池に宴す、梨園の樂人を召し合樂す、右丞悲み甚し、時を賦し志を言ふ、賊平定し皆獄に下る、或るひと右丞の詩を以て行在に聞す、肅宗亦之を憐み、下して太子中允に遷す、宥罪と謂ひ、拜官と謂ひ、感聖恩と謂ふ、皆其の事なり、
【大意】忽然と漢詔を蒙りて冠冕に還る、始めて覺る湯王が網を解きし意を、天日の皇明なるも主上の皇明なるに比すれば猶ほ自から暗く、天壽は廣長なるも、主上の廣長なるに比すれば多しと云はず、花は喜氣を迎へて皆笑ふことを知る、鳥も人の歡心を識りて嬉しく歌ふ、夏に聞く我一人ならず、百城の羣守も新に佩印すと、各のと共に雙闕に還來して共に玉珂を鳴らさん、
【餘論】此の詩は起句對法を以て成る、右丞としては死活の二道に彷徨する時、恩命を蒙りて死を免るのみならず、太子中允の官と爲る、良に懼天喜地、察すべきものあり、佛を知らざる詩人學者、此の點を以て右丞を議す、我が應戸皇子が、崇峻天皇の事ありしを以て、人に議せらるると殆んど一致す、應戸も已むを得ず、右丞も已むを得ざるの勢に値ひたればなり、右丞の非、右丞自ら知る、

是を以て身を處する整潔、終身非道の事を爲さず、小罪償うて餘り有り、右丞の心事、其の當時、明かに知る者あり、後世の批議、右丞に於て何か有らん、蓋し此の詩は喜を記するに止まる、右丞集中最下の部に屬す、

酌酒與裴迪

酒を酌んで裴迪に與ふ

酌酒與君君自寬

酒を酌んで君に與ふ君自ら寛うせよ、

人情翻覆似波瀾

人情翻覆波瀾に似たり、

白首相知猶按劍

白首の相知も猶劍を按じ、

朱門先達笑彈冠

朱門の先達彈冠を笑ふ、

草色全經細雨濕

草色 全く細雨を経て濕ひ、

花枝欲動春風寒

花枝動かんと欲して春風寒し、

世事浮雲何足問

世事浮雲何ぞ問ふに足らん、

不如高臥且加餐

如かず高臥して且餐を加へんには、

【注解】酌酒、齊の鮑照の詩、酌

酒以自寬とあり、波瀾、晉の陸機の詩、翻覆若波瀾とあり、先達、齊非子說林篇に、管仲、鮑叔、相謂つて曰く齊國の諸公子、其れ輔く可き者は、公子糾にあらざれば、則ち小白なり、子と各の一人に事へん、先達するものは軟めん、彈冠、漢の王吉と貢禹は友たり、世に稱す王陽在位、貢禹彈冠、其の取舍同じきを言ふなり、

【大意】酒を酌んで一杯君に與ふ、君心を寛く持ち玉へ、世の人情は冷と爲り炎と爲り翻覆極まり無く波瀾と同じ、黒髪の時より白髪の時まで交際せる者も、何か意見を異にする時は劍を按じて或は害を加へんとす、而して朱門の先達は後進を誘導するのが道であるに、反つて彈冠する者を笑ふに至る、草の色は全く細雨を経て濕ひ、花の枝は開かんと欲するも春寒寒うして猶ほ開かず、世事は總て浮雲、固定せしもの無し、是も非も問ふの要なし、如かず高臥して且加餐せんには、

【餘論】此の詩は仄で起し、平で結ぶ、平仄互換の法とす、明の王弼州曰く摩詰の七言律、應制、早朝、諸篇より外、往往常調に拘らず、酌酒與君の詩、四聯皆反法を用ふ、此は是初盛唐に無き所、尤も學ぶべからず、顧華玉曰く此の篇、朋友反覆誣譖を爲す者あるに似たり、或は小人醜沮の類、故に此を爲り以て之を解く、趙松谷曰く草色一聯、即ち是即景託諭、衆卉を以てして而も時雨の滋を邀へ、奇英を以てして而も春寒の痛を受く、即ち植物の類、且其の平を得ざるものあり、況んや世事は浮雲變幻す、又安んぞ問ふに足らんや、之を六義に擬すれば、比とすべく、興とすべし、黃培芳は「唐賢三昧集」に於て此の詩を評し、七律中上乘のものとして爲す、

朝川別業

朝川の別業

近體詩 酌酒與裴迪 朝川別業

不到東山向一年。

歸來纔及種春田。

雨中小草色綠堪染。

水上桃花紅欲然。

優妻比丘經論學。

僂僕丈人鄉里賢。

披衣倒屣且相見。

相歡語笑衡門前。

【注】優妻比丘、齊郡牟尼弟子に優妻顯婆迦羅あり、廣譯して木瓜盛と言ふ、曾前に癡あり、木瓜の如きが故なり、比丘は譯して乞士と言ふ、食を人に乞ひ、以て道を修する人なり、顯可久曰く、在り家謂優妻、出家謂比丘、顯は優妻を誤認せしなり、經論學、經律論を三藏と稱して佛徒の學ぶべきものとす、此の句は但經部と論部との學を爲す意味、僂僕丈人、「莊子達生篇」の中に曰ふ、仲尼、楚に過ぎ、林中より出でて、僂僕の者の網を承くる、猶ほ之を扱ふがごときをを見る、仲尼曰く、子は巧なるかな、道あるか、曰ふ我に道あるなり、五六月、丸二を累れて而して懸ちざれば、則ち失ふもの鎖、三を累れて而して懸ちざれば、則ち失ふもの十に一、五を累れて而して懸ちざれば、猶ほ之を扱ふがごときなり、吾の身を處くや、概木の拘めるが若く、吾の臂を執るや、楢木の枝のごとし、天地の大、萬物の多と雖も、而かも唯、網翼を之れ知る、吾、反せず倒せず、萬物を以て網の翼に易へず、何を爲すとして得ざらんや、孔子曰く、弟子に謂つて曰く、志を用ふること分れざれば、乃ち神に凝るとは、其れ僂僕丈人の謂ひかと、倒屣、魏の王粲、長安に徙る、左中郎將蔡邕、見て之を奇とす、時に邑、才學顯著、朝廷に貴重せらる、常に車騎、巷に填ち、賓客、座に盈つ、榮が門に在りと聞きて、屣を倒にして之を迎ふ、

【題義】 朝川の別業に歸りて、自分の志す所を敍するなり、

【大意】 東山の朝川別業に到らざること殆ど一年なり、今日歸來して纔かに春田を畔す時に及ぶ、雨の中の草色は綠色染むるに堪へたるが如く、水上塘の桃花は紅色然えんと欲するが如し、偶々訪問せらるる者は、優妻比丘の如き僧と、僂僕丈人の如き賢とのみ、彼は經論の學者なり、此は郷里の賢者なり、其の訪問を受けたときは、衣を披き屣を倒にして迎へて以て相見す、共に相歡び相語笑して衡門の前に立つ、

【餘論】 此の詩の作法は多く其の例を見ず、余は前半と後半と切斷して、七絶と爲し、乃ち佳なるを覺ゆ、蓋し前半は佳なり、後半は佳ならず、優妻に對するに僂僕を以てす、音律に精通する右丞としては、亦是僂僕、即ち背曲の類ならずや、

早秋山中作

早秋山中の作

無才不敢累明時。
思向東溪守故籬。
不厭尙平婚嫁早。

【注】尙平、「高士傳」に尙長、字は子平、河内朝歌の人、隱居して仕へず、建武中に、男女嫁娶既に畢る、是に於て遂に北海の禽慶と俱に五嶽名山に遊び、竟に終はる所を知

卻嫌陶令去官遲、
 草堂蛩響臨秋急、
 山裏蟬聲薄暮悲、
 寂寞柴門人不到、
 空牀獨與白雲期。

却つて嫌ふ陶令官を去るの遅きを、
 草堂の蛩響秋に臨んで急に、
 山裏の蟬聲暮に薄つて悲しむ、
 寂寞たる柴門人知らず、
 空牀獨り白雲と期す、

【大意】無才我の如き者官に在るは卻つて明時を累するものなり、乃ち思ふ東溪に向つて故籬を守るの好きに如かずと、尙平が婚嫁の人事を早く爲したるは賛成するが、陶令が官を去るの遅きは不賛成なり、草堂を繞りて鳴く蛩の響は新秋に臨んで急、山裏に飛散して鳴く蟬の聲は日暮に薄つて悲し、寂寞たる我が柴門は何人も訪ふ者無し、空牀に坐して唯白雲の飛來するあるを期するのみ、
 【餘論】此の詩は、早秋山居の趣を敘し、平平、右丞集中最下に屬す、不敢、不厭、不到、一律の中、此の如きは法として有るべからず、

積雨朝川莊作 積雨朝川莊の作

積雨空林煙火遲、
 蒸藜炊黍餉東菑、
 漠漠水田飛白鷺、
 陰陰夏木嘯黃鸝、
 山中習靜觀朝槿、
 松下清齋折露葵、
 野老與人爭席罷、
 海鷗何事更相疑。

【注解】蒸藜、藜は「アカザ」、是の若葉を蒸して茹ふ、菑は、菑田なり、習靜、梁の朱超の詩に、當夏苦炎埃、習靜對三花寮とあり、佛典の修定の意味、坐禪を習修するなり、朝槿、槿は和名「ムクゲ」、落葉灌木の屬、芳極、木槿、朝に開き夕に萎む、故に朝槿と曰ふ、清齋、或は六日間を清齋し、或は一月を清齋し、或は一年、或は一生活と、肉食や葷を食はざるを清齋と曰ふ、野老のみを以て食とするなり、露葵、俗に松露

と稱す、松下に多く生ず、折るも可なり、取るも可なり、爭席、「列子黃帝篇」に、楊朱、老子に其の過を請ひ問ふ、老子曰く、而誰たり、而野野たり、而誰と與にか居る、大白は辱れたるが若く、威德は足らざるが若し、楊朱雖然として容を變じて曰く、故んで命を聞く、其の往くや、舍る者迎將し、家公、席を執り、妻、巾櫛を執り、舍る者席を避け、婦者、甕を避けしに、其の反るや、舍る者之と席を争へり、海鷗、前に辨ぜり、

【大意】雨が久しく降るを以て煙火が空林を出づること遅遅たり、人家は藜を蒸し黍を炊ぎて以て東菑に畔作する人に餉送する、而して漠漠たる水田には白鷺の飛ぶあり、陰陰たる夏木には猶ほ黄鳥の

嘯づるあり、山中の習静者は世事皆朝種の如きを觀察し、松下に於て清齋して茹ふものは露葵なり、野老は人と席を争ひ罷んで、皆、無我の境に入る、海鷗も之と親しむべきに、夏に相疑ふ如きは何ぞや、

【餘論】此の詩は、右丞集中上乘に属する者にして、古來より歎稱せざる者無し、一二の句は田家に關し、三四の句は雨中の景色を敘し、五六の句は自身の状態を敘し、七八の句は全首を總括して敘し、作法として整正の極とす、但し三四の句に就いて古來より議論あり、「古今詩話」に云ふ、王維、詩名あり、然れども好んで人の文章を取る、佳句、行到水窮處、坐看雲起時、此英華集中の詩なり、漢水田飛白鷺、陰陰夏木轉黃鸝、李嘉祐の詩なり、大都古人の詩を誦する多く、積むこと久しうして記せず、則ち往往己が有と爲すのみ、「石林詩話」に云ふ、雙字を下す極めて難し、須らく五言七言の間、五字三字を除去する外、精神興致、全く兩言に見はれしむべし、方に工妙と爲す、唐人云ふ、水田飛白鷺、夏木轉黃鸝、李嘉祐の詩、王摩詰竊かに之を取ると、非なり、此の兩句の好處、正しく漢漢陰陰の四字を添ふるに在り、此摩詰、嘉祐の爲め點化し、以て自ら其の妙を見す、李光弼が郭子儀の軍に將として、一たび之に號令して、精采數倍するが如し、然らずんば嘉祐の本句但是景を寫すのみ、人皆到るべし、「竹坡詩話」に云ふ、摩詰四字、下し得て最も穩切と爲す、趙松谷曰く、案するに諸家、唐の七言律を采選する者、必ず一詩壓卷を取る、或は崔の黃鶴樓を推し、或は沈の獨不見を推し、或

は杜の玉樹彫傷、昆明池水、老去悲秋、風急天高等の篇を推す、吳江の周篆之則ち謂ふ、冠冕莊麗は、岑參の「早朝」の如きは無く、澹雅幽寂は右丞の積雨輞川の如きは無し、澹齋翁、二詩、廊廟山林の神髓を得るを以て、取つて以て壓卷と爲す、眞に古を空しうし、今に準するに足る、之を要するに諸詩皆妙處あり、譬へば秋菊春松の如く、各の一時の秀を擅にす、未だ其の優劣を辨じ易からず、或は此を掲げて、彼を抑ふるあり、多くは覽者、自ら分別を生ずるに由るのみ、之を輿論に質せば、未だ必ずしも僉同じからず、今、清潭の考ふる所、松谷と全く同意見なり、老杜が風塵三尺劍、社稷一戎衣は、庾信の終封三尺劍、長卷一戎衣より來るにあらずや、而も庾信より上ること千仞の高きに在り、是古人を驅役して、古人に驅役せられざるものなり、唐の李肇の如きは、詩を論ずる資格無し、余以て取るに足らずと爲す、

過乘如禪師蕭居士嵩邱蘭若

乘如禪師蕭居士嵩邱蘭若を過ざる

無著天親弟與兄

無著天親弟と兄と、

嵩邱蘭若一峯晴

嵩邱の蘭若一峯晴る、

食隨鳴磬巢鳥下

食は鳴磬に隨つて巢鳥下り、

【注解】無著天親、無著は阿僧伽と名く、天親は婆伽婆と名く、釋迦牟尼佛の滅後一千年に印度の健陀羅國に生る、無著は兄にて天親は弟、

行踏空林落葉聲

行くゆく空林を踏めば落葉聲あり、

进水定侵香案濕

进水は定んで香案を侵して濕さん、

雨花應共石床平

雨花は應に石床と共に平かなるべし、

深洞長松何所有

深洞長松何の有する所ぞ、

儼然天竺古先生

儼然たる天竺の古先生、

共に大乘の法を演説して、世に千部の論師と稱す、天親は始め兄と説を異にし、小乗論五百部を作る、無著の爲めに破却せられて、後、大乘に歸せし人なり、嵩邱、即ち嵩山、河南の河南縣の西南十五里に在り、進水、寺庭に湧出する水なり、松谷は

【法苑珠林】を引きて注す、今の要にあらす、雨花、花が雨るなり、雨の花にはあらす、『法華經』に天雨曼陀羅華とあり、古先生、『西昇經』なる老釋一致を説きし經に、老子、西に昇り、道な竺乾に開き、古先生と號す、善く無爲に入り、不終不始、永く存して無礙と、李榮曰く、竺乾は西域の國名なり、古先生と號するは、無上大道を謂ふ、天に先だつて生ず、故に古先生と曰ふ、即ち老子の別號なり、游潭曰く、釋迦が漢土に生れて老子と稱し、老子が竺乾に生れて釋迦と稱する意なれば、今は古先生を釋迦と見るべきなり、

【題義】乗如禪師が住する蘭若に蕭居士が寓居するを訪問して、此の詩を作る、竺土にて阿蘭若處と稱するは、漢譯して精舍とか、無譯處とか稱する意義となる、無譯處は即ち梵寺なり、

【大意】乗如と蕭との二人は無著と天親と兄弟して佛を奉ずると同じ、其の住する嵩山の蘭若は一峯晴れて見はる、齋食の時磬を鳴らして殘飯を鳥に施す、巢に在る鳥が其の時を知つて下る、又、經行して空林を踏めば落葉の聲がする、甍前に進り出づる水は香案を侵して濕さん、天花は雨り來りて石床一面に平等なり、深洞長松に何の有る所ぞと問はば、儼然として在す天竺の古先生のみなり、

【餘論】此の詩は、清淨の境と、清淨の人とを錯綜して之を敘し、梵寺の詩として最上乘に屬す、佛徒は齋食の後、林中を經行して、身體の安穩を修す、三四の句之を言ひ、进水香案を濕ほすは柔軟なり、雨花飛來するは平等なり、而して空を説くものが佛道の本旨なるに、深洞長松の下に、何物か存すと見れば、此は是石像の佛陀にてあるなり、諸説多く結句を評して謂禪師居士即佛と曰ふは、余は之を取らざるなり、右丞の作意も、蓋し、余が考と同じかるべし、天の字二字あるは例の病なり、乾竺と改むべきなり、

春日與裴迪過新昌里訪呂逸人不遇

春日裴迪と新昌里を過ぎ、呂逸人を訪うて遇はず

桃源一向絕風塵

桃源一向風塵を絶す、

柳市南頭訪隱淪

柳市南頭隱淪を訪ふ、

到門不敢題凡鳥

門に到りて敢て凡鳥を題せず、

看竹何須問主人

竹を見て何ぞ須ひん主人を問ふことを、

城外青山如屋裏

城外の青山屋裏の如く、

【注解】凡鳥、『世説』に、晉の陸康、呂安と善し、一たび相思へば、千里も駕を命ず、一日、安、康を訪ふ、康、在らず、兄の釋喜、戸を出でて之を延く、門に入らず、門上に鳳の字を題して去る、鳳を割けば凡鳥なり、看竹、『晉書王徽之傳』に、吳中

東家流水入西鄰。

東家の流水西鄰に入る、

閉戸著書多歲月。

戸を閉ちて書を著はし歲月多し、

種松皆作老龍鱗。

松を種ゑて皆老龍鱗と作る、

微之、僕ち此を以て之を賞し、歌を盡して去る。閉戸著書、『後漢書王充傳』に、王充以爲へらく、俗備、文を守り、多く其の眞を失すと、乃ち門を閉ちて書思し、慶弔の禮を絶ち、戸閉鎖、各の刀筆を置き、論衡八十五篇、二十餘萬言を著はす、

【題義】春日に友人の表迪と共に新昌里に呂逸人を訪問したるも、逸人不在なるを以て、詩を作りて其の遺憾なるを敘す、

【大意】新昌里は桃源と同様一向に風塵の跡を絶つ、柳市南頭に隱淪する逸人を訪ふ、門に到るも敢て凡鳥の字を題する惡戯は爲さず、竹を看れば満足する、何ぞ曾て主人を問はん、城外の青山は屋裏の如きの觀あり、東家より流るる水は西鄰に入る、逸人は閉戸して書を著はし多く歲月を涉る、自ら種ゑし小松が老龍鱗と作る、

【餘論】此の詩は、頗る白樂天の風調に類し、右丞の高格を見る能はず、表迪も和詩あり、今は錄せず、

の一士大夫の家に好竹あり、之を觀んと欲し、僕ち與に坐して、竹下に造り、調詠良久し、主人還掃して坐せんと請ふ、微之、顧みず、將に門を出でんとす、主人乃ち門を閉ち、

送方尊師歸嵩山

方尊師が嵩山に歸るを送る

仙官欲往九龍潭。

仙官往かんと欲す九龍潭、

旄節朱旛倚石龕。

旄節朱旛石龕に倚る、

山壓天中半天上。

山は天中を壓して天上に半し、

洞穿江底出江南。

洞は江底を穿ちて江南に出づ、

瀑布杉松常帶雨。

瀑布杉松常に雨を帶び、

夕陽彩翠忽成嵐。

夕陽彩翠忽ち嵐を成す、

借問迎來雙白鶴。

借問す迎來雙白鶴、

已曾衡嶽送蘇耽。

已曾に衡嶽蘇耽を送る、

に、老君は神虎の符を佩び、流金の鈴を帶び、紫毛の節を執り、金精の巾を巾るとあり、朱旛、雲の劉季韓の詩、月殿曜朱旛、風輪和寶鐙とあり、蘇耽、漢の蘇耽が事ば異説もあるが、傳ふる所、蘇耽、嘗て異人に遇うて、神仙の術を授かる、一日、忽ち庭除を灑掃す、母、其の故を問ふ、曰く、仙道以て成る、上帝來り召す、乃ち一履を留め、母に與へて云ふ、爾むる所即ち有り、又云ふ、明年火に覆せん、庭前の井水桶葉を取りて之を救へ、耽、鶴に乗つて仙去す、已にして果して覆す、母、日に百人を活かす、後、嘗て白鶴に騎り來りて、郡城樓の上に止まる、

【注解】仙官、天上の仙官、仙人を敬稱して言ふ、九龍潭、『一統志』に、九龍潭は太室東巖の半に在り、

山巖の衆水、成、此に歸す、蓋し一大峽なり、峽は九壘を作し、每壘結んで一潭を爲し、遂に相灌輸す、水色洞黑、其の深き無際なり、巖壁險峻、波濤怒激す、登臨の者、此に至りて輒ち慄然として畏を生ず、石あり戒を記す、人の龍潭に遊ぶ者、語笑以て神龍を誚すこと勿れ、龍怒るときは雷の恐ありと、旄節、『真誥』

【題義】方尊と稱する道士が嵩山に歸るを送る詩、嵩山には釋士の寺と道士の觀とあるなり、

【大意】方尊仙官は今九龍潭に向うて往き、旒節朱旒を以て飾り、石龕に倚らんと欲す、其の嵩山は高峻にして天中を壓して、天上に半を占む、其の洞は深淵にして江底を穿ちて、江南にまで及び出づ、瀑布の長流は杉や松が常に雨を帯びる如く濕ふ、夕陽の光が彩色又は翠色と變化して嵐を成す、別れに臨んで問ふ、今日歸山して再び雙白鶴に乗りて來らるるは何れの日ぞ、昔曾て衡嶽に羣鶴を送りしことを思ふ、

【餘論】此の詩は、全體完好の作、殊に頸腹二聯、清くして美、醜にして藉、天中天半、江底江南、巧を弄するに意無くして、自然の巧たるを覺ゆ、後人、此等の作法を學ぶべきなり、

送楊少府貶郴州 楊少府が郴州に貶せらるるを送る

明到衡山與洞庭 明に衡山と洞庭とに到る、

若爲秋月聽猿聲 若爲が秋月猿聲を聽かん、

愁看北渚三湘近 愁へ看る北渚三湘の近きを、

惡說南風五兩輕 惡んぞ說かん南風五兩の輕きを、

【注解】衡山、名衡山、一名南嶽、一名雲山、一名天柱山、是れ安徽省霍山縣の西に在り、此の詩の衡山は湖南省衡陽縣の西北三十里に在るものを云ふ、雲山を南嶽と名け

青草瘴時過夏口

青草瘴時に夏口を過ぎ、

白頭浪裏出湓城

白頭浪裏に湓城を出づ、

長沙不久留才子

長沙久しく才子を留めず、

賈誼何須弔屈平

賈誼何ぞ弔ひん屈平を弔するを、

たるは漢の武帝、湖南の衡山を以て南嶽と稱したるは隋の文帝とす、少府が貶せらるる郴州は乃ち湖南の桂陽郡なればなり、洞庭湖は湖南の岳州府を以て中心とす、北渚、衆流を帶約して、潭成して一川なるを之を

北渚と謂ふなり、南風、夏日の風を南風と曰ふ、五兩、雜の羽を以て五兩を重ね、楫尾に繋ぎ以て風を候す、楚人、之を五兩と謂ふ、青草瘴、「廣州記」に、地、瘴氣多し、夏を青草瘴と爲し、秋を黃茅瘴と爲す、王友塚崖謂ふ、郴州夏口は皆嶺内に在り、瘴氣有ること無し、瘴は漢字の訛か、蓋し青草湖の水漲るを謂ふ、青草湖、一名巴邱湖、北は洞庭に連なり、南は瀟湘に接し、東は汨羅の水を納る、夏秋の際、水漲りて洞庭と一と爲る、水涸るときは、此の湖先づ乾き、青草生ず、湓城、「元和郡縣志」に、隋の文帝、陳を平らげ、江州總督を置き、理を湓城に移す、古の湓口城なり、今日は江西省の九江府に屬す、長沙と郴州とは同じく湖南に屬すれども、里程は數百里を隔つ、賈誼を出ださんとして、長沙の字を用ひたるなり、故に郴州と言はず、長沙と言ひたるなり、賈誼は洛陽の人、李斯は其の學を吳公に傳へ、吳公は賈に授く、漢の文帝、召して博士と爲す、起遷して大中大夫に至る、賈、正朔を定め、服色を易へ、法度を制し、禮樂を興さんと請ふ、大臣の忌む所と爲り、出でて長沙王の太傅と爲る、梁王の太傅に遷りて卒す、年三十三、湘水を度るに及んで、弔屈平一賦を作り、屈平に託して以て我が不平を歌ふ、

【題義】楊が郴州知府の助役即ち少府と爲りて貶せらるるを送り、其を慰安するなり、

【大意】明日は京を去つて衡山と洞庭湖の邊に到るならん、若爲んぞ秋月を觀、又猿聲を聽くに堪へんや、目は愁を以て看る北渚三湘の近きを、口は惡んぞ說かんや、南風五兩輕しと言ふことを、廣東

の風土病たる青草瘴の時、夏口を過ぎ、白頭浪の高き裏に溢城を出づるならん、而かも長沙の邊地には久しく才子を留むることは、朝廷必ず之を不可とせん、賈誼は不平の氣を以て弔屈平賦を作りしも、君は賈誼に倣うて不平を訴ふべからず、

【餘論】此の時、衡山、洞庭、北渚、夏口、沔城、長沙等、山名、地名、層層として出づ、而かも煩を覚えざるは、所謂運用の妙あればなり、太白の峨眉山月の七絶と比すべし、青草瘴を疎崖は青草漲の訛ならんと、通せざるにはあらず、蓋し湖南と郴州は廣東に接近して、嶺内と稱するも、瘴氣は多きならんと想像しての句なれば、余は漲を取らずして瘴を取るものなり、

出塞作

出塞の作

居延城外獵天驕、
白草連天野火燒、
暮雲空磧時驅馬、
秋日平原好射鵞、
護羌校尉朝乘障、

居延城外天驕獵、
白草天に連り野火燒く、
暮雲空磧時に馬を驅り、
秋日平原好し鵞を射る、
護羌校尉朝に障に乘じ、

【注釋】居延城、居延は地名、漢は縣、張掖郡に屬す、都尉治と爲す、今日の甘肅酒泉の邊、外蒙古に屬す、天驕は匈奴を曰ふ、匈奴の剛驕は天の許す所と彼等は稱するなり、空磧は青草空しく、唯沙磧のみなり、護羌校尉、漢武の設けし官名、秩は二

破虜將軍夜渡遼、

破虜將軍夜遼を渡る、

玉靶角弓珠勒馬、

玉靶角弓珠勒の馬、

漢家將賜霍嫖姚、

漢家將に霍嫖姚に賜はらんとす、

て遼を拵ぐを謂ふ、破虜將軍、破虜の將軍にて、官名にはあらず、塞上防禦の將軍は、皆破虜將軍なり、渡遼、遼は所謂遼東なり、【漢書】に、遼東の烏桓反す、中郎將范明友を以て渡遼將軍と爲し、之を擊たしむとあり、靶は鞞の革、即ち人の執る所、霍嫖姚、漢の霍去病は年十八にして侍中と爲り、騎射を善くす、大將軍に従つて嫖姚校尉となり、虜を擊ち、大將軍を棄てて、數百里深く入り、以て首虜を新捕す、

千石、節を持して以て西羌を襲するなり、乘障、乘は登るなり、障は塞上險要の處を別に築きて城と爲し、因つて吏士を置き、障蔽と爲して以

【題義】右丞が御史と爲つて、塞上を監察する時の作とす、

【大意】居延城外に天驕の徒が獵せんと欲す、白草は天に連り、之を野火を以て燒く、暮雲飛ぶの時、空磧の上を馬にて驅逐し、秋日平原に於て好し鵞を射るに、護羌校尉は朝に障上に登り、破虜の將軍は夜遼水を渡る、玉靶や角弓や珠勒の馬、誰に之を賜はらんとするや、漢家は破虜の大功ある霍去病の如き人に賜ふなり、

【餘論】此の詩に、前半拗して作る、明の王弼州評して曰く、甚だ佳、馬字を兩犯するにあらずんば、當に壓卷とすべきに足る、謝廷環曰く、驅馬は驅雁に作るべし、證するに、鮑照の秋霜曉驅雁の詩と、「洛陽伽藍記」の北風驅雁、千里飛雪との二を以てす、趙松谷曰く、驅馬、射鵞、皆塞外射獵

の事、若し驅雁に作らば、上下の句を全く貫串せず、詩中複字は初盛唐の名手、往往忌まず、我國の三浦梅園は「詩轍」に於て曰く、此の詩空の字、將の字、馬の字、各の二、連空（連天を梅園は連空とせり）の空は天といふが如く實字なり、空積の空は「ムナシキ」にて虚字なり、將軍の將は「ヒキキル」にて官名なり、將賜の將は虚字なり、傍犯忌まず、只此の馬の字實字なるを以て、重複とす、よく出来たる詩なれども、瑕となる事を古人も惜めり、黃培芳は「唐賢三昧集」の評に、氣體甚好、然れども卻つて是聲屋瓦上より震はざる者、此雅筆俗筆の分、精氣靈氣の別、之を辨せん、虚字多用する、固より不可なり、亦全く用ひざるも不可なり、斟酌宜しきを得、是善學に在り、

聽百舌鳥

百舌鳥を聴く

上蘭門外草萋萋

上蘭門外草萋萋

未央宮中花裏栖

未央宮中花裏に栖む、

亦有相隨過御苑

亦相隨つて御苑を過ぐるあり、

不知若箇向金隄

知らず若箇か金隄に向ふことを、

入春解作千般語

春に入りて千般の語を作すを解し、

【注】百舌鳥は和名「モズ」、伯勞の一種、一名を反舌と曰ふ、全身黒色、喉、甚だ尖る、鳴聲圓滑、人家、之を畜ふ、冬に至りて、則ち死す、上蘭は觀の名、上林苑に在り、漢の元后は深宮に居ることを厭ひ、上蘭に校獵すと「漢書」に在り、金隄、水の隈、監うして金の如しと

拂曙能先百鳥啼。曙を拂うて能く百鳥に先つて啼く、

萬戶千門應覺曉。萬戶千門應に曉を覺るべし、

建章何必聽鳴雞。建章何ぞ必ずしも鳴雞を聽かん、

の意なり、

【大意】上蘭門外は草色萋萋たり、未央宮中花裏に栖む、後宮が御苑を過ぎるときは、之に隨つて行くこともあり、知らず若箇か金隄に向つて飛ぶや、春暖に入つてから種種の鳥の語を爲す、曙色を拂うて外の鳥よりも早く啼く、萬戶千門皆此の鳥の爲め曉を覺る、建章宮は何ぞ必ずしも鳴雞を聽くを要せん、

【餘論】未央の央を仄聲として用ふ、詩として論すべき箇處無し、

王右丞集卷十終

終